

## 学生参加型導入教育の認知能力と成果の相関に関する 実験経済学的手法を用いた研究

The Research Using Method of Experimental Economics about the Correlation  
between Cognitive Ability and Outcome of Introduction Training on the Type of Student  
Participation.

主任研究員名：齋藤 立滋

分担研究員名：大谷 剛

本研究では、近年の実験経済学的手法を取り入れた学生参加型導入教育について検討すると共に、学生の認知能力とその成果の相関を定量的に測定することを目的とする。実験経済学における取引実験を導入教育として活用できはしないかと着想した。この手法による効果を検証するために、実験の被験者はすべて学生とする。財の取引を実際に行うことを通じて経済学の基本的な構造を学ぶグループと、同じ内容を従来型の座学で学ぶグループに分ける。前者は後者と比較して実感が持ちやすく理解も進むものと思われるが、この推察が正しければ、取引実験は導入教育として効果的であると判断できる。また、学生の受講状況や成績を追跡調査することにより、導入部分での教育効果がどの程度持続的に学生の学習意欲に影響するのかを検証する。

平成 31 年（令和元年）度の研究成果として、次の研究ノートを出版した。

齋藤立滋・藤井陽一朗・大谷剛「ゲームを用いたアイスブレイクの効果測定」、『大阪産業大学経済論集』、第 21 巻第 2・3 合併、pp43-55、2020 年 6 月発行。

アイスブレイク的手法を用いた既存研究では、その実践が数多く報告されているが、アイスブレイクがクラスメンバーやグループメンバーの親疎にどれだけの影響を与えるかに関する定量的な研究は管見のかぎり存在しない。本稿の目的は、アイスブレイクがクラスメンバーやグループメンバーの親疎にどれだけの影響を与えるかに関する定量的な分析を試みることにある。

具体的には、被験者をランダムに 3～5 名のグループに分け、アイスブレイクとして自身をあらわすキーワードを提示させる形で自己紹介とグループ内でのインタビューをおこない、相互に他己紹介を行う手法を用いる。この手法を採用した理由は、もっとも一般的なアイスブレイク的手法であることと、自己紹介をする際のキーワードにポジティブなフレーミングとネガティブなフレーミングを用いることで、その後のグループワークに差が出るか検証しやすくなるためである。被験者は大阪産業大学と明治大学の 1 年次配当の基礎演習の受講者で、ランダムに自己紹介を行う際のキーワードにポジティブとネガティブのフレーミングを教示する。

実験の結果、ポジティブ・フレームを教示したグループの方が、ネガティブ・フレーム

を教示したグループよりも多くのキーワードを提示していることが明らかとなった。これは、フレーミングによってアイスブレイクで親近感を抱きやすくなる可能性を示唆している。一方で、アイスブレイク後に実施したグループ課題では、成績に差が出なかった。今回は予備的な実験で被験者が少なかったことから、被験者数を増やしてその効果を検証していく必要があることが明らかとなった。

# 学生参加型導入教育の認知能力と成果の相関に関する 実験経済学的手法を用いた研究

齋藤 立滋（経済学部経済学科）

本研究では、近年の実験経済学的手法を取り入れた学生参加型導入教育について検討すると共に、学生の認知能力とその成果の相関を定量的に測定することを目的とする。実験経済学における取引実験を導入教育として活用できはしないかと着想した。この手法による効果を検証するために、実験の被験者はすべて学生とする。財の取引を実際に行うことを通じて経済学の基本的な構造を学ぶグループと、同じ内容を従来型の座学で学ぶグループに分ける。前者は後者と比較して実感が持ちやすく理解も進むものと思われるが、この推察が正しければ、取引実験は導入教育として効果的であると判断できる。また、学生の受講状況や成績を追跡調査することにより、導入部分での教育効果がどの程度持続的に学生の学習意欲に影響するのかを検証する。

個人として次の論文を出版した。これらの論文は、今後の社会保障に関する経済実験の準備としての研究も兼ねている。

齋藤立滋「在宅医療の推進は医療費を減らせるかー研究動向のサーベイと費用比較の枠組みー」、『大阪産業大学経済論集』大阪産業大学学会、第20巻第2号、pp.47-56、2019年3月発行。

入院医療を在宅医療に切り替えることで、本当に国民医療費が削減できるのかどうか検証するために、在宅医療の医療費に関する先行研究のサーベイと、入院医療と在宅医療の総医療費分析の比較の枠組み(推計式)を提示している。また、在宅医療の医療費の推計に関して、在宅医療における診療報酬価格のデータと患者数のデータが必要となるが、先行研究で在宅医療の患者数の推計方法が示されているので、それを紹介し検討している。

齋藤立滋「診療報酬制度における在宅医療の形成と展開」、『大阪産業大学経済論集』、大阪産業大学学会、第21巻第1号、pp.53-69、2019年10月発行。

日本の医療の診療報酬制度における在宅医療の形成と展開の特徴は、次の2点である。第1に、全体的に、診療報酬制度における在宅医療は、改定のたびに充実してきたことである。その点数の項目は次第に増え、算定点数も引き上げられてきた。対象となる患者も、自己注射→痴呆症（認知症）高齢者→末期がん患者→終末期→小児（幼児）と対象は拡大してきた。第2に、近年の改定で、在宅医療を推進しようとするあまり

に、項目と点数計算がやや複雑になってきていることである。

# 学生参加型導入教育の認知能力と成果の相関に関する 実験経済学的手法を用いた研究

大谷 剛（経済学部経済学科）

本研究組織は、近年の発展が目覚ましい実験経済学的手法を取り入れた学生参加型導入教育について検討すると共に、学生の認知能力とその成果の関係を定量的に測定することを目的としたものであった。組織内においては、主任研究員と分担研究員などが共同で研究や実験を進めたため、個人の研究成果を正確に抽出することは難しい。それゆえ、ここでは、本研究組織としての成果を報告する。

本研究組織では、実験経済学における取引実験を導入教育としても活用できはしないかと着想し、その効果を検討すべく学生を被験者とした経済実験の実施を目指した。具体的な手順は次のようになる。

財の取引を実際に行うことを通じて経済学の基本的構造を学ぶグループと、同じ内容を従来型の座学で学ぶグループに分ける。前者は後者と比較して実感が持ちやすく理解も進むものと思われるが、この推察が正しければ、取引実験は導入教育として効果的であると判断できる。また、学生の受講状況や成績を追跡調査することにより、導入部分での教育効果がどの程度持続的に学生の学習意欲に影響するのかを検証する。

上のような手順を踏まえて執筆されたのが、平成 31 年（令和元年）度の研究成果である、

齋藤立滋・藤井陽一朗・大谷剛「ゲームを用いたアイスブレイクの効果測定」、『大阪産業大学経済論集』、第 21 巻第 2・3 合併、pp43-55、2020 年 6 月発行。

である。

アイスブレイク的手法を用いた研究はこれまでもなされてきたが、アイスブレイクがクラスメイトの親睦を深める上でどの程度効果的なのかということについては、必ずしも十分な検討がくわえられてきたとはいえない。そこで、本研究では、アイスブレイクがクラスメンバーの親疎にいかなる影響を与えるのかについて定量的な分析を試みた。

アイスブレイクの具体的な手法としては、先行研究でも使用されてきた手法を用いた。すなわち、ランダムに 3～5 名からなるグループに分けられた被験者は、そこで自身を示すキーワードを提示することにより自己紹介を行う。一方で、他のメンバーの自己紹介に対して、インタビューも行う。こうすることにより、メンバー間のアイスブレイクが実現するという手筈である。なお、被験者としては、大阪産業大学と明治大学の 1 年次配当の基礎演習の受講者が選ばれた。

実験の結果、ポジティブ・フレームを教示したグループの方が、ネガティブ・フレームを教示したグループよりも多くのキーワードを提示していることが明らかとなった。すなわち、フレーミングによってアイスブレイクで親近感を抱きやすくなる可能性が示唆

される。

残された課題としては、十分な数の被験者を確保することが挙げられる。学生を被験者としてアイスブレイク実験を行うためには、未だ親密になっていない段階の学生を集める必要がある。だとすれば、同実験は新入生などを対象とせざるを得ない側面があり、今回の実験においても被験者を集める上での障壁となった。